

A-27 小児てんかんにおける光過敏性の検討 —光過敏性脳波異常を示した症例について—

富山医科薬科大学医学部小児科

○小西 徹, 松沢純子, 本郷和久, 山谷美和,
八木信一, 宮脇利男

【目的】光刺激は発作誘発因子の代表であり、光過敏性てんかんとして従来より多くの報告がある。しかし、光過敏性の発現機序、合併頻度、出現年齢など未だ不明の点が多い。今回、通常脳波検査において光過敏性異常波を示したてんかん症例を集積し、その臨床脳波特徴について検討した。

【対象・方法】対象は、当科および関連病院でてんかんとして1年以上経過観察され、かつ覚醒時脳波が記録されている796例（男児416, 女児380）である。経過中の光賦活時脳波に1度でも突発波が誘発された例を光過敏性ありとした。光賦活は通常の間歇的白色閃光刺激（3Hz～30Hz）である。

【結果】1) 光過敏性の頻度：光過敏性異常波のみ62例：A群, 光過敏性発作も合併13例：B群の計75例（9.4%）であった。2) 臨床背景：A群は女児が優位（♂28：♀34）、B群は男児が優位（11：2）で、両群とも痙攣性疾患の家族歴、熱性痙攣の既往が高かった。3) てんかん症候群：特発性全般てんかんで高頻度で（JME 45.5%, GMaw 25.0, CAE 24.3）、局在関連性てんかんで4-8%と少なかった。4) 出現年齢：学童期から増加し始め、思春期直前にピークを示し、以後漸減し、16歳以降は極めて少数であった（平均：11.7歳）。また、多くの例では光過敏性は1-2年の短期間で消失した。5) 誘発周波数：9Hz～15Hzが高頻度であり、低または高周波数での誘発は少なかった。6) 特異な1群：15例では極めて類似した臨床脳波所見を示した。つまり、局在関連性てんかん、前頭部棘波（かなり頻発し、全般化傾向あり）、脳波所見に比較して発作予後良好、痙攣の家族歴（同胞例）・熱性痙攣の既往が多い、などである。

【結語】てんかんの光過敏性は、遺伝・痙攣素因と密接に関連し、かつ年齢依存性（学童期から思春期）の強い出現様式を示すことが示唆された。

A-28 小児てんかんにおける光過敏性の検討 —光過敏性発作を示した症例について—

富山医科薬科大学医学部小児科

○八木信一, 小西 徹, 松沢純子, 本郷和久,
山谷美和, 宮脇利男

【目的】テレビゲーム、アニメ番組などの光刺激で誘発されたてんかん性の発作が世間を騒がせている。そこで、全てんかん症例中の光過敏性発作の頻度および臨床脳波特徴について調査した。

【対象・方法】対象は、当科および関連病院でてんかんとして1年以上経過観察され、且つ経過中に覚醒時光賦活脳波が記録されている796例（男児416, 女児380）である。光過敏性発作としたのは、本人・家族の問診より、発作時に何らかの光刺激が存在し、時間的に誘発因子になったと考えられるものである。

【結果】1) 20例（2.5%）で光過敏性発作を認めた。光過敏性発作のみ9例、他のてんかん経過中に合併11例であった。2) 臨床背景：男児17例、女児3例と圧倒的に男児に多かった。また、痙攣性疾患の家族歴7例、熱性痙攣の既往10例と高かった。3) 発作年齢：6歳～20歳で、思春期直前にピークを示した。4) 発作症状：目がチカチカ→頭痛嘔気、意識混濁→二次性全般発作と部分発作を思わせるものが18例と多く、全般発作は5例のみであった-重複あり。5) 光の種類：テレビゲーム15例、テレビ・ビデオ8例、ゲームセンター2例、その他2例（重複あり）と多様であった。80%の発作が光刺激から短時間で出現したが、長時間してから出現も数発作認めた。6) 脳波所見：13例では発作直後の脳波で光過敏性突発波を認め、9Hz～15Hzの周波数刺激で誘発されることが多かった。また、発作が抑制されると短期間で脳波が正常化する傾向を認めた。7) 発作予後：他のてんかんを合併した2例を除き極めて良好で、特にVPAは臨床発作のみならず脳波光過敏性にも著効を示した。

【結語】光過敏性発作の発現機序として、遺伝または痙攣素因が関与することが推察され、そして、その多くは年齢依存性を有する予後良好なてんかんであるとされた。